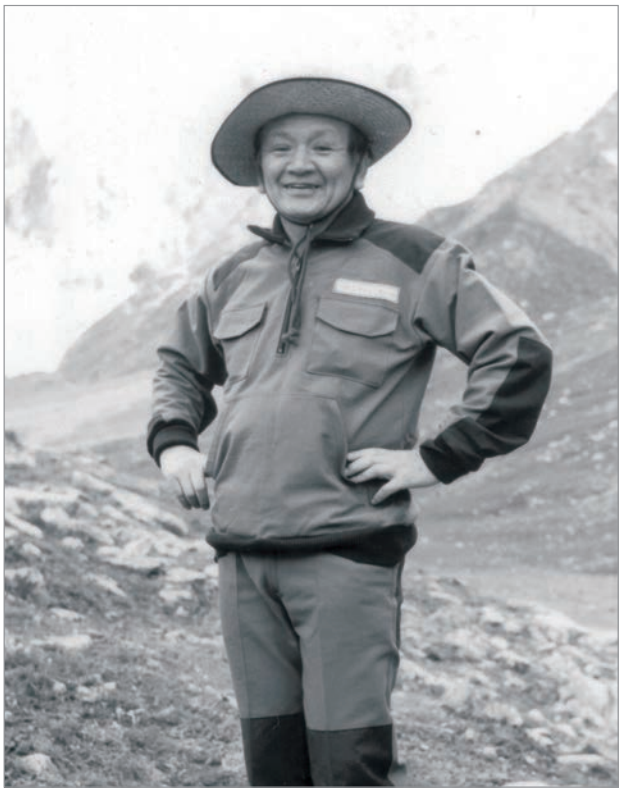
小谷氏コーナー



コングールにて（小谷隆一氏）

小谷隆一氏

小谷　隆一　◆　年譜

一九二四年（大正13）
一九三七年（昭和12）
一九四四年（昭和19）
一九四五年（昭和20）
一九四六年（昭和21）
一九四七年（昭和22）
一九五〇年（昭和25）
一九五四年（昭和29）
一九六四年（昭和39）
一九六五年（昭和40）
一九六六年（昭和41）
一九六九年（昭和44）
一九七三年（昭和48）
一九七四年（昭和49）
一九七五年（昭和50）
一九七六年（昭和51）
一九七七年（昭和52）
一九七九年（昭和54）
一九八〇年（昭和55）
一九八一年（昭和56）
一九八三年（昭和58）
一九八四年（昭和59）
一九八六年（昭和61）
一九八八年（昭和62）
一九八九年（平成元）
一九九一年（平成3）
一九九七年（平成9）
一九九八年（平成10）
二〇〇二年（平成14）
二〇〇三年（平成15）
二〇〇六年（平成18）

八月　京都市中京区に生まれる。
旧制京都第二商業学校入学。中学三年頃から山に魅せられる。森本次男先生の薫陶を得て山岳部に入部し、主に京都北山や奥美濃を歩く。
旧制松本高等学校入学。思誠寮に入る。不自由ながらも青春を謳歌し全人格的教育を受けた高校時代であった。また大木保太郎氏と共に山岳部に入部、穂高や槍を舞台に登山に取り組む。寮生活では総務を務め、同期生に辻邦生、一期後輩に北杜夫がいる。
秋、想い出の美ヶ原。
春、寮主催映画祭で山岳映画家の塚本閤治氏と会う。
三月　松本高等学校文科Ⅰ卒業（第二十六回）。
四月　東京帝国大学法学部入学、山岳部に在籍。北南アルプスを中心とした激しい登山を行う。
三月　東京大学法学部政治学科卒業。
四月　家業を継ぐため伊勢藤紙工（株）入社。
十一月　松下貞子と結婚。
七～八月　社用でヨーロッパ訪問の途次、初めてスイスアルプスを訪れヴェッターホルン、ユングフラウ、マッターホルンに登る。エミール・ストイリ、ヴイリー・ストイリの親子とも知合う。以降グリンデルワルトの町を好み何回か訪れる。
ミュンヘンにバウアー氏を尋ねカラコルムや遠征の情報知識を得る。一九六〇年頃より海外登山の計画に入る。
日本青年会議所会頭就任。
五～六月　京都府山岳連盟カラコルム・ヒマラヤ登山隊隊長としてディラン峰（七二七三m）初登頂に挑むが、天候の悪化により山頂直前にて断念した。この遠征隊については北杜夫氏の『白きたおやかな峰』に詳しい。
十月　伊勢藤紙工（株）代表取締役社長就任。
京都経済同友会代表幹事就任（一九七六年迄）。
京都府スキー連盟会長就任。
小林義正氏から、高嶺文庫を一括して譲り受ける。自らの蔵書も含め昭和五三年一月までに約三千冊の山岳書を整理し終えた。以後コレクションの充実を図ると共に、坂戸勝巳、島田巽、近藤信行氏等、山岳書を通じての交友関係が広がる。
山岳書収集について阿部恒夫氏の協力を得る。
ディラン峰に初登頂した因縁のハンスシェル氏とパキスタンで顔を合わせ、その後交友を深める。
ロンドンの古書店フランシス・エドワード、ガストン、カーベンディシュを訪ね『クリスチャン・アルマーのガイド手帳の複写本』等を購入。以後、ヨーロッパ出張の際は、度々ロンドンに立寄り山岳書を求める。
パリの骨董市にて谷文晁の『日本名山図会』を購入。
京都商工会議所副会頭就任（二〇〇一年迄）。
伊勢藤紙工、伊勢藤工業、（株）伊勢藤三社合併し、代表取締役社長就任、イセト紙工（株）に社名変更。
京都カラコルムクラブ隊隊長として、中国コングール峰に偵察遠征。
『山なみ帖』（茗渓堂）刊行。
京都府山岳連盟会長就任。
「藍綬褒章」受章。
日中友好太白山合同登山隊総隊長として、四月三十日太白山に登頂。
「山岳名著百選展　小谷コレクションより」開催、於・京都丸善（京都国体記念協賛）。
京都カラコルムクラブ隊隊長として、七月十一日北稜ルートから中国コングール峰（七七一九m）初登頂に成功。
京都府公安委員長就任（一九九六年迄）。
六月　代表取締役会長就任、（株）イセトーに社名変更。
京都府体育協会会長就任（二〇〇五年迄）。
六月　取締役名誉会長就任。
一月　小谷コレクションを信州大学に寄贈。
三月二十三日逝去。（享年八十一歳）